



Title	取り立て否定形式「Vはしない」の構文文法的分析
Author(s)	山倉, 佐恵子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2026, 2025, p. 97-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106339
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

取り立て否定形式「Vはしない」の構文文法的分析

山倉佐恵子

1. はじめに

本稿では、助詞「は」を含む否定形式「Vはしない」に関してその構文的特徴を議論する。特に、「Vはしない」のVの部分に生起する動詞の傾向が、通常の否定形式「Vない」のVに生起する動詞とは大きく異なるという事実を指摘した上で、「Vはしない」において、その意味は[V]+[は]+[ない]の各形態要素とその意味が単純に結合したものではなく、「Vはしない」という全体で新たな意味機能を獲得していることを議論したい。動詞に助詞「は」が接続した際の意味を論じた主要な先行研究として野田(1995)や尾上(1981)がある。それらの先行研究では、「Vはしない」の分析に関しては、「は」の機能に特に焦点が当てられる傾向にあり、生起するVの分布に偏りが見られることに関する議論はなされていない。言い換えると、「Vはしない」は通常の否定形式「Vない」に取立て助詞が加わったものという認識の域を超えない分析である。この観点では何故「Vはしない」に生起する動詞に偏りがあるのかという疑問は説明できない。本論ではコーパス調査から「Vはしない」に生起する動詞に無意志動詞がより多く接続するという明確な傾向があること、そしてその傾向は、丹羽(2002)と工藤(1992)の観点に立ち、「主観的否定」という構文としての意味機能によって動機づけられていること、その用法の一つは意志性に関連することを示唆する。

2. 先行研究

動詞連用形に助詞「は」が接続する否定形式「Vはしない」は、「は」の対比の機能がどのように働いているかということを中心に研究が行われてきた。((野田:1995)、(尾上:1981)等)まず「は」が主語と述語など文の基本的な二項に以外をつなぐ場合は、基本的に対比であるということが述べられている(尾上:1981)。その尾上(1981)では、動詞に「は」が接続する例については「対比の色、特に“譲歩的な”気持ちが強くなる。」(尾上 1981:110)と、対比の用法の1つと定義している。

- (1) 「きのう教科書を読みはした。」(……読みはしなかった。)
「一見したところ、美しくはある。」(……美しくはない。)(尾上 1981:110)

野田(1995)がこの論を引き継ぎ、「Vはしない」を他の否定形式「～ハ～ナイ」、「～ノデハナイ」などと比較し、それぞれの特徴を取り立ての働き方という観点から論じた。その中でも「Vはしない」は「譲歩的な否定」(野田 1995:164)を表すとされている。「譲歩的な否定」とは「シハシナイ¹はスケール上のある段階に達していることを否定するとともに、その逆の段階ではないことも示すことができる。」(野田:同)というものである。「呼吸が乱れてはいしない」という例を考えると、「呼吸が乱れていること」が当てはまるスケールを想定し、その否定に加えスケール上の別の段階も否定することができるということである。

- (2) (a) 「一応はまだ安定剤が効いていますし、呼吸も乱れてはいませんが」
(a)では「呼吸が乱れている」ことは一応否定されているが、完全に危機を脱した状態ではないことも示されている。つまり図1のスケールCに至っていることが否定されているとともに、Aではないことも示されている。このようにシハシナイはスケール上のある段階に達していることを否定するとともに、その逆の段階ではないことも示すことができる。(野田 1995:163-164)

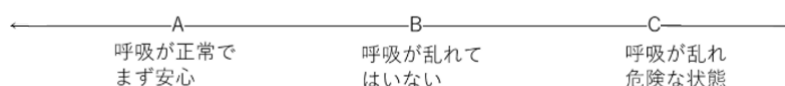


図 1 野田(1995:164)

¹シハシナイ = 「Vはしない」

野田(1995)における「Vはしない」は、語彙的な意味から喚起されるスケールを特徴としている。(2)(a)「呼吸も乱れてはいませんが」では、患者の健康状態の程度のある段階を否定し、副詞が共起する例(3)(b)「はっきりとは答えてくれはしなかった」では、答え方に「はっきり」「あいまい」などの程度を想定して否定している。

(3) (a)はっきりとは答えてくれはしなかった。

(b)はっきり答えてくれはしなかった。

(c)? はっきり答えてくれたのではない。

「はっきり」という副詞は、「はっきり答える」>「あいまいに答える」というように、広い意味での程度性をあらわす。そして、「～ハ～ナイ」や「～シハシナイ」を用いると、答え方が「はっきり」という程度に至っていることが否定されるとともに、その逆(全く答えない)ではないことも示され、譲歩的な否定になる。(野田 1995:164)

これらは助詞「は」の機能が動詞にどのように反映されるかを考慮した重要な指摘である。しかし他の先行研究を考慮すると、段階性の否定だけでは「Vはしない」の意味を説明しきることが難しいと考える。それを助詞「は」以外の側面から分析できる可能性を示唆しているのが、丹羽(2002)や工藤(1992)である。これらは日本語の方言体系に、客観的否定と主観的否定という2種類の否定が存在することを示している。そして、丹羽(2002)では愛知県尾張北部方言に「ン」と「セン」いう方言形式が存在し「ン」が客観的否定、「セン」が主観的否定を表すことが述べられている。その共通語訳が通常の否定「Vない」と「Vはしない」である。

(4) (a)「アメガ フラン」(雨が降らない)

(b)「アメガ フレセン」(雨が降りはしない)

(c)「タカラクジワ アタラン」(宝くじは当たらない)

(d)「タカラクジワ アタレセン」(宝くじは当たりはしない)(丹羽 2002:15)

これは「Vはしない」と「Vない」の対立には、主観性が関わっているということを示す証拠だと考える。この詳細を見つつ、主観的否定・客観的否定の内実について概観していきたい。

2.1 主観的否定と客観的否定

まず否定に主観的・客観的な対立を主張したのは工藤(1992)である。ここでは愛媛県宇和島方言の否定形式に「スラヘン」と「セン」について、「スラヘン」が「話し手の態度そのものに関わる<主観的>否定文」(工藤 1992:129)であり、「セン」は「<事態の不成立性(文の命題としてある事態が存在しないこと)>という客観的側面に関わる<客体的>否定文」(工藤:同)であることを明らかにした。スラヘンは主観的な否定文として、「雨が降った」などの他者の断定や自身の期待を否認する場合に用いられるものである。

(5) (a)「月曜日雨降ったなあ」

「降らへんで」

(b)「月曜日雨降らなんだなあ」

「うん、降らなんだぜ」

(a)²においては事態成立性を断定していることに対して、話しては<否認>している。一方、(b)¹においては、他者の事態不成立性の断定を話し手は承認している。スラヘンはこのように<他者の確信としてある事態成立性に対する、話し手の否認>を表す場合にのみ使われ、<承認>の場合には使われない。(工藤 1992:132-131)

(5)の用例は、「雨が降った」という他者の確信している出来事に対して「降らなかった」と述べている。これが(b)のように「雨が降らなかった」という確信であれば、否定形式は同意を示すことになる。その場合はスラヘンは用いることができず、センが使用される。

² 例文番号は筆者が編集(以下も同様)

- (6) (a) 「ちいと雨降ってくれたらええのに、ひとつちや降らへんなあ」(降らんなあ)
 (b) 「おおと雨降らなんだ。よいよ助かったなあ」(*降らへなんだ)

センによる否定文は、話し手の期待性に中立であり、従って不成立の事態に対する話し手の感情・評価性にも中立である。場面・文脈がなければ、「雨降らなんだなあ」「起きんぜ」は、話し手にとって期待どおりあるいは期待はずれの不成立事態であるのかどうかは分からない。話し手は<客観的に><事態の不成立性>を確認・記述するのみである。だが「起きらへんぜ」といえば、話し手にとって期待はずれの事態であることを明示する。(工藤 1992:129)

(6)は、自分自身の期待が不成立であることへの不本意性を示している例である。(a)のスラヘンの場合は「雨が降ってくれたらいいのに」という期待が不成立の存在が示されているのに対し、(b)の場合は「助かった」で雨が降らないでほしいという望みの成立が含意される。そして期待が成立した例では、「降らへなんだ」は用いることができないのである。このようなスラヘンの話者の主観を反映した特徴を、次のようにまとめている。

- (7) 1, <事態成立(肯定性)>への<他者(2, 3人称者)の確信>に対する<話し手(1人称者)の否認>
 2, <事態成立(肯定性)>への<期待の不成立>に対する<話し手の不本意性>(工藤 1992:132)

主観的な否定形式は、他の方言に関する論文でも示されている。丹羽(2002)では、工藤(1992)の論を引き継ぎ愛知県尾張北部方言「セン」「ン」についても客観的否定と主観的否定の対立があることを述べた。

- (8) 宝くじの場合、絶対当たらないというのが客観的な否定であり、全体として見れば必ず誰かに当たるのに、自分達には当たらないという気持ちの表現が主観的な否定である。

(a) タカラクジワ アタラン (宝くじは当たらない)

(b) タカラクジワ アタレセン (宝くじは当たりはしない)

上の(a)は「当たらない」ということを客観的に叙述している。アタランは100%当たらないということである。これは前田(1955)の大阪方言のような強い否定ではない。買わなければ絶対に当たらないから、アタランは「同一平面上の平行線は交わらない」というのと同じくらい普遍的な真理を客観的に述べているのである。これは当たらないことを命題として述べていて、事実と矛盾する表現であるが、現実には当たらないことが多いので、(a)のように使っても実際はそれほど不自然ではない。それに対して(b)のアタレセンは、予想(期待)されることを当事者としての立場で否定している。当たる可能性は皆無ではないが、自分の主観的な判断では自分達に当たることは多分ないだろうという、万が一の期待に対する自嘲や慰めの表現ということになる。このようにセンは、前後の状況から実現する(宝くじの場合は確率が低い)と予想される内容を、話し手が自らの立場から期待や評価などを込めて否定するという主観的な表現である。(丹羽 2002:15)

アタランが客観的、アタレセンが主観的な否定であることが示されており、対応する共通語訳として「当たらない」「当たりはしない」が用いられている。「Vはしない」に対応する言語形式が「話し手が自らの立場から期待や評価などを込めて否定するという主観的な表現」(丹羽:同)と定義されているのである。

- (9) 「ン」は事実を表現する客観的な否定、「セン」は話し手の判断を表現する主観的な否定であり、文法的に見れば、「ン」は表現内容、「セン」は表現態度である。(丹羽 2002:13)

これは「Vはしない」にも主観的否定の用法があるということを示唆するものだと考える。

当論文ではこれらの客観的否定と主観的否定という否定分類を基に、「Vはしない」に主観的否定の用法があるということをも主張する。そしてそれは「Vはしない」が「Vない」に取立て助

詞が加わったものという認識の域を超え、構文としての意味機能をもつものであることを含意する。手法としては「V はしない」と「V ない」の違いを、まず V 部分にあたる動詞の傾向から明らかにする。主にコーパス(中納言書き言葉均衡コーパス(以下、BCCWJ), NDL N-gram viewer(以下 NDL) を用いて比較検討を行い、「V はしない」の V には無意志動詞が現れやすいことを示す。この傾向は、意志という主観性を表す用法があることに由来し、「V はしない」が要素を接続した構文的・結合価的な意味をもつことを示唆するものである。

3. 「V はしない」における V の性質

まず BCCWJ を用いて、「V はしない」と通常の否定形式「V ない」の比較を行った。それぞれの検索条件を以下に示す。

- (10) 「V はしない」キー動詞 品詞動詞＋書字出現形は＋語彙素為る＋語彙素ない
- 「V しない」キー動詞 品詞動詞 and 未然形＋語彙素ない

調査の結果「V はしない」の BCCWJ の用例数は 753 件、「V ない」は 579,783 件であった。ダウンロード可能件数を考慮し、「V ない」はそのうち 100,000 件を対象とする。それぞれ V の語彙素を出現件数順に上位 15 位までを抽出したのが表 1 である。語彙素による検索のため補助動詞として用いられた場合なども同じ項目で計算されている³⁴⁵⁶。

	「V ない」語彙素 用例 100,000 件	件数	出現率 (%)		「V はしない」語彙素 用例 753 件中	件数	出現率 (%)
1	居る	11850	11.9%	1	<u>有る</u>	100	13.3%
2	為る	11190	11.2%	2	<u>成る</u>	99	13.1%
3	成る	10002	10.0%	3	<u>出来る</u>	50	6.6%
4	出来る	7256	7.3%	4	為る	25	3.3%
5	知れる	5147	5.1%	5	<u>分かる</u>	23	3.1%
6	行く	4166	4.2%	6	<u>忘れる</u>	18	2.4%
7	分かる	3980	4.0%	7	居る	17	2.3%
8	知る	2333	2.3%	8	知る	14	1.9%
9	得る	2116	2.1%	9	行く	13	1.7%
10	言う	2089	2.1%	10	<u>来る</u>	13	1.7%
11	過ぎる	1381	1.4%	11	<u>無くなる</u>	9	1.2%
12	来る	1366	1.4%	12	言う	9	1.2%
13	見える	1251	1.3%	13	<u>呉れる</u>	8	1.1%
14	思う	1129	11.9%	14	<u>困る</u>	7	0.9%
15	付く	901	0.9%	15	<u>仕舞う</u>	7	0.9%

表 1 「ない」「V はしない」動詞部分の比較

³ 「居る」「仕舞う」「行く」「来る」「呉れる」は「ている」「てしまう」「ていく」「てくる」「てくれる」などを含む結果である。以降「仕舞う」「呉れる」は「V はしない」での用例が補助動詞「てしまう」「てくれる」のみである点を考慮し、両方を表記する。

⁴ 出現頻度・順位ともに高い例は下線かつ太字、出現順位のみが高い例は下線をほどこした。

⁵ 「有る」の場合、対応する「ない」に接続する形式は存在しないため出現順位の比較はできない。しかし「V はしない」において、出現件数がかなりの高頻度であることを示すため同様に下線、太字を引いた。

⁶ 「V はしない」で 15 位以内かつ「V ない」で 15 位以下であった動詞の出現件数は下記参照。
忘れる 221 例、仕舞う（てしまう）70 例、失う 42 例、困る 21 例、無くなる 22 例

「Vはしない」方が、出現頻度が高い動詞は「ある」「なる」「忘れる」「来る」「無くなる」「呉(てくれる)」「困る」「仕舞う(てしまう)」8例である。出現順位で比較すると「出来る」「分かる」を含む10例になる。これらの共通点には、状態や変化を表す動詞「ある」「なる」「できる」「無くなる」や、心理動詞「分かる」「忘れる」「困る」などであることがあげられる。残りの「呉れる(てくれる)」「仕舞う(てしまう)」「来る(てくる)」も補助動詞という点で類似点がある。そして本動詞の「来る」以外に共通するのが、動作が無意志動詞であると言う点である。ここでの無意志動詞というのは、意志性が無い動詞である。意志性の定義について述べられた論考は多数あるが、そのうちの1つ杉本(1995)(1997)では、「意志動詞・無意志動詞の定義に関しては、主体の意志が、動詞が示す動作・作用・状態の成立・実現の決定要因となっている動詞を意志動詞とよび、それ以外の動詞を無意志動詞とよびたい。」(杉本 1997:35)と定めている。杉本(1995)(1997)は意志動詞か無意志動詞かを判定する「客観的テスト」なども提唱し、「私は(が) [特定の時点・期間]～します(～してみます)」という特定時点を明示した意志文への成立・不成立が意志性を判断する基準の1つだとした。他にも「～てみる」「～う/ようと思う」などの表現形式やいくつかの副詞(「恐る恐る」「やむをえず」など)と共起できるかどうかを例としてあげている。これらに当てはめると、「困る」「忘れる」などは無意志動詞であることがわかりやすい。

- (11) 分かりました。それじゃ私は6時に出かけます。
 * (私は) そのことは明日忘れます/忘れてみます。 杉本(2007:36)
 (12) * (私は) 明日、困ります。
 (13) * (私は) 明日、そのことがわかります。

他に「ある」「できる」などの状態動詞は命令形や禁止形にならないことや「てしまう」は語彙的に不注意・無意識なことを含意することが無意志動詞であることを示している。「てくれる」も受益動詞であり、当人の意志を表すのには不向きである。

- (14) * ビルがあれ。
 (15) * 水泳ができろ。
 (16) * (私は) むこうへ行ってしまってみる。
 (17) * (私は) 財布が無くなってみる。
 (18) * (私は) 恐る恐る荷物をもってくる。
 (19) * (私は) やむをえず元気になる⁷。

ここではわかりやすさを重視し、ムードの語形などを用いて意志性を確認したが、本論での意志動詞の定義は、早津(2018)が、宮島(1972)を引用して述べた「「意志動詞というのは、主として意志的動作にもちいられる動詞」とし、それ以外を「無意志動詞」とみなす」(早津 2018:143)としたい。⁸つまり主体の意志によって成立・実現を制御できないものは、無意志動詞であると考え。以上のように「Vはしない」で出現数の多い例には、無意志動詞がほとんどであることを確認した。

もう一方の「Vない」の出現数の高い動詞を分析していくと、「居る」「為る」「知る」「行く」「言う」5例が観察できる。このうち「居る」や「為る」「行く」「言う」は意志動詞であるという特徴があげられる。そのため、先ほどとは対照的に「客観的テスト」を行っても、文が成立する。

⁷ 「なる」は「原則として無意志動詞であるが、「それじゃ、私が掃除当番になります。」のように、自分の意志で選択できる場合は例外的に意志動詞の用法となる。」とされる。(杉本 1997:44) 本論でも、「なる」は無意志動詞として扱う。

⁸ 仁田(1988)や宮島(1972)では意志/無意志動詞を命令形や禁止形などの可否を基準にして分類しているが、本論では早津(2018)、杉本(1995)(1997)に従い「「ムードの語形」の有無は、たしかに意志/無意志性を判断する目安にはなるが、これによって意志動詞か無意志動詞かを峻別することは容易ではない。」(早津恵美子, 2018]:142)と考える。

- (20) (私は)明日、家にいます。
- (21) (私は)明日、それをしてみます。
- (22) (私は)恐る恐る行きます。
- (23) (私は)やむをえず言います。

意志動詞/無意志動詞という点で「V ない」と「V はしない」には動詞の傾向性に差異が感じられるのである。傾向性をより強調するために、それぞれの使用頻度の差についても言及しておきたい。「V はしない」で出現順位が高いが「V ない」で 15 位以下だった動詞は出現率が極端に落ちる。「呉れる（てくれる）」「忘れる」「仕舞う（てしまう）」「困る」「無くなる」の 5 例は、「V ない」での出現率が呉れる（てくれる）0.8%、忘れる 0.2%、仕舞う（てしまう）0.07%、困る 0.02%、無くなる 0.02%である。決して「V ない」でよく使用される動詞が、偶然「V はしない」だけに多く現れたというわけではないのである。「V ない」で高頻度の動詞も違いがみられる。「居る」「為る」は出現率が「居る」「為る」約 11%と最も高いが「V はしない」の場合はそれぞれ約 4%、約 3%になる。「行く」「言う」も出現頻度を 4.2%から 1.7%、2.1%から 1.2%と半分ほどまでさげている。

表 1 では意志性を軸にした偏りがみられたが、BCCWJ の用例数では、「V はしない」の例が少ないという懸念がある。ほとんどの動詞は出現率が数個で大きく変化してしまう。「忘れる」などにみられる偏りが、偶然ではないことを示すためにより用例数を確保できる NDL⁹で、以上の傾向性を確かめたい。

	「V ない」	「V はしない」	「V はしない」 / 「V ない」 (%)	「V ない」	「V はしない」	「V はしない」 / 「V ない」 (%)
動詞	為ない (しない) ¹⁰	為はしない (しはしない)		成らない (ならない)	成りはしない (なりはしない)	
出現頻度	31214 (34902061)	221 (61629)	0.7% (0.1%)	44396 (55140699)	684 (135099)	1.5% (0.2%)
動詞	居ない (いない)	居はしない (いはしない)		困らない	困りはしない	
出現頻度	1550775 (27901318)	5515 (21395)	0.3% (0.07%)	79003	5056	6.3%
動詞	知れない	知れはしない		忘れない	忘れはしない	
出現頻度	5880921	2456	0.04%	517459	12242	2.3%
動詞	行かない	行きはしない		来ない (こない)	来はしない (きはしない)	
出現頻度	1163437	6379	0.5%	1536212 (1615358)	17264 (10826)	1.1% (0.6%)

⁹ NDL では図書・雑誌資料約 230 万点（約 17 億種類の単語及びフレーズ）を対象として書字出現形式で検索を行った。

¹⁰ 「為ない」「居ない」「成らない」「無くならない」補助動詞「来ない」は通常仮名表記のため、「しない」「いない」「ならない」「なくならない」「こない」類も同時に検索を行った。ただ仮名表記の場合、別の動詞の送り仮名「し」「い」等も含まれている。例：話[しはしない]、買[いはしない]、等

動詞	言わない	言いはしない		無くならない (なくならない)	無くなりはいしない (なくなりはいしない)	
出現頻度	413240	2686	0.6%	8014 (71420)	1016 (7502)	12.6% (10.5%)
動詞				しまわない	しまいはしない	
出現頻度				95142	5700	5.9%

表 2 動詞別「V ない」「V はいしない」出現割合の比較

表 1 の「V はいしない」「V ない」それぞれで出現頻度・順位が共に高かった動詞を検索し、「V ない」に対する「V はいしない」の出現率の割合を算出した。「V ない」の高かった動詞群は「する」0.7%「いる」0.3%「知れる」0.04%「行く」0.5%「言う」0.6%になった。それに対し「V はいしない」の動詞群は「なる」1.5%「困る」6.3%「忘れる」2.3%「来る」1.1%「無くなる」12.6%「仕舞う（てしまう）」6%¹¹である。全体的に「V はいしない」で共起した表現の方が割合が高く、特に「困りはしない」「忘れはいしない」「無くなりはいしない」「てしまいはしない」の出現頻度が多いことがわかる。BCCWJ で調査した結果が、NDL でも同様に観察できることが確認できるだろう。

表 2 の結果を見て、特に出現頻度が高い「困りはしない」「忘れはいしない」「無くなりはいしない」「てしまいはしない」の 4 種類について着目したい。これらは基本的に語彙的にネガティブな意味を表す点が共通している。この語彙的なネガティブ・ポジティブに偏りがある点から表 1 について振り返る。実は BCCWJ で「V はいしない」との共起率が 15 位以下の動詞は、語彙素が 225 種類(15 位を含む全体は 240 種)あり、そのうち 66 例がネガティブな意味（不利益・破壊・喪失・攻撃・失敗など）を含みやすい動詞である。¹²

(24) 失う、拒む、消える、厭う、引き下がる、壊れる、折れる、捨てる、取り乱す、傷付く、消え去る、恐れる、抗う、捨て去る、逃げる、落ちる、見逃す、逆らう、立ち去る、逃げ出す、減る、殺す、崩す、損なう、殴る、威張る、引っ繰り返る、破る、脅す、枯れる、弱まる、襲う、反する、傷付ける、ばれる、捕まる、消し去る、祟る、騙す、落ち込む、食らう、投げ出す、外す、振り回す、逃す、見失う、吹っ掛ける、慌てる、裂く、歪める、敗れる、罹る、見捨てる、否む、切り裂く、喚き立てる、たじろぐ、蔑む、見落とす、挫ける、奪う、陥る、嘆ずる、断ち切る、為出かす、いじける

そのため、他にもネガティブ・ポジティブを内包する動詞を対象に、「V はいしない」との語彙の否定的/肯定的評価性の関係性を分析していきたい。

4. 「V はいしない」と語彙的なネガティブ/ポジティブの対立

語彙の意味にネガティブとポジティブの対立が見られるため、感情を表す心理動詞を対象に調査する。先程と同様に「V ない」に対する「V はいしない」の割合を基本感情（喜び・恐れ・嫌悪・怒り・悲しみ・驚き）を中心にポジティブの語彙を足して算出した。結果を表 3 のようにネガティブ/ポジティブで対立させ、頻度の差を示している。

¹¹ 「仕舞いはしない」は「V はいしない」の用例が検出できなかったため、仮名表記で行った。
¹² BCCWJ 「V ない」100,000 件の場合は、約 1700 個の語彙素に対して否定的な意味を含むのは約 170 個である。

	ポジティブな感情	出現頻度	「V はしない」 / 「V ない」 (%)	ネガティブな感情	出現頻度	「V はしない」 / 「V ない」 (%)
動詞	喜ばない	喜びはしない		悲しまない	悲しみはしない	
出現頻度	54114	946	1.7%	7333	542	7.3%
動詞	楽しまない	楽しみはしない		恐れない	恐れはしない	
出現頻度	5749	47	0.8%	63439	3609	5.6%
動詞	笑わない	笑いはしない		怒らない	怒りはしない	
出現頻度	29157	553	1.8%	44992	2342	5.2%
動詞	好まない	好みはしない		嫌わない	嫌いではない	
出現頻度	207191	571	0.2%	2107	131	6.2%
動詞				驚かない	驚きはしない	
出現頻度				54025	4816	8.9%

表 3 ポジティブ/ネガティブと「ない」「V はしない」の関連性の比較

「ない」に対する「V はしない」が占める割合が、ネガティブな感情動詞は「悲しむ」7.3%「恐れる」5.6%「怒る」5.2%「嫌う」6.2%、「驚く」8.9%、であるのに対し、ポジティブな場合「喜ぶ」1.7%「楽しむ」0.8%「笑う」1.8%「好む」0.2%となる。このように「V はしない」のVは無意志動詞でかつネガティブなものが共起しやすいことが推測される。この結果に関しても、特に大きな影響を与えているのは意志性であると考ええる。ポジティブ/ネガティブによる差異は、意志「文」と関連していると思われる。意志文とは意志を表す文であるが、意志動詞を述語とする文が必ず意志文を表すわけではない。肯定形意志文の場合は次のような制約が存在する。

- (25) a. 主語と話者が一致する。(??あなたが行こう)
- b. 話者が事態の実現を志向している。(??淹れたてのコーヒーを腕にかけよう)
- c. 事態は、その成立が行為者によって制御可能か、もしくはその達成に向けて努力可能な、未実現の事態である。(??罪から救われよう) (北崎 2021:21)

(a)のように基本的に主語は1人称であり、(b)は肯定文では、語彙がポジティブな意味であることを原則にする。そして(c)では無意志動詞は、生起しにくいことを含意する。

- (12) *(私は)明日、困ります
- (26) * 話を聞き洩らそう

しかし否定形意志文の場合、(b) (c)の条件はありつつも語彙的に否定的評価を含意する場合も用いることができる。反対に肯定的な状態を指向するものは用いられにくい。(杉本 1995) ¹³

¹³ 例えば「否定意志」を表す表現の1つに「まい」がある。「まい」において、否定文では「否定的評価を伴う無意志動詞に下接」(杉本 1995:50)できることが示されている。

- (i) 「失くす」「間違う」「失敗する」「(風邪を) ひく」など否定的評価を伴う無意志動詞に下接して話者の意志を表すことができるという特徴がある。これは「～う/よう」とは大きく異なる。逆に「落ち着く」などは「う/よう」とは共起できても意志の「まい」とは共起できない。
- (a) 大切な書類は決して失くすまい。
- (b) もう二度と試験の前に風邪をひくまい。(杉本 1995:50)

- (27) (わたしは) 困りはしまい/ないつもりだ
(28) * (わたしは) 落ち着きはしまい/ないつもりだ

否定的意志文は、ネガティブな無意志動詞と共起できることと、「Vはしない」にネガティブ・無意志への偏りが見られることには関連性があると考ええる。「Vはしない」と同様に否定意志の意志文が志向する出来事は、動詞の非実現である。Vがネガティブな出来事の非実現は、基本的にポジティブな事柄である。「困る」や「無くなる」が実在化しなければ、「困らない」「無くならない」の達成を含意するため、それは主体にとって望ましい出来事なのである。反対に、語彙的にポジティブであれば「よるこばない」「落ち着かない」の達成を目指していることになり、特殊な使用状況が必要になる。

そして「Vはしない」に意志動詞+「はしない」の割合が少ないのは、意志動詞の場合もネガティブで無意志性を好む傾向があるからではないかと考える。表1で出現頻度が高かった「居る」「する」「行く」「言う」などは意志動詞で且つ語彙的にニュートラルである。肯定的/否定的評価のどちらも含意していない。「Vはしない」が意志動詞でも、ネガティブで無意志性のあるものを好むのであれば不適当な動詞類である。ネガティブというと「逃がさない」「殺しはしない」などの動詞の方が共起しやすいはずである。無意志性に関しては、「主体が、動詞が示す動作・作用・状態を発生・出現がコントロールできない事態である」ものだと仮定する。つまり意志動詞に無意志性がある場合というのは、意志的動作だが主体には発生・実現がほとんど制御下に無い状況などを意味する。

- (29) 「図書館に行く？」
「行かないよ。」(*行きはしないよ。)
(30) 「(二度と帰って来ないであろう相手に対して、) あなたが返ってくるまで、わたしどこへも行きはしないわ。」(行かないわ。)

(27)は行くことを実現が一般的に容易なできごとであるのに対し、(28)は期限の無い約束や「どこへも」という語彙が「行かない」ことの実現を限りなく低くしている。このように条件を整えることで、意志動詞でニュートラルな「行く」も、「Vはしない」に接続した際の容認度を上げることができる。これは「Vはしない」が無意志・ネガティブな動詞を志向していることを示す結果であると思われる。

以上のように「Vはしない」は無意志動詞・ネガティブな意味への偏りがあり、それは意志文という主観性を表す用法を持つからだと言うことを示唆した。そしてこの動詞の傾向性や意志の意味は、「Vはしない」が助詞「は」に接続しただけのものだとする従来の理解では解釈できないと考える。そのため「Vはしない」が構文として結合価的な意味を生み出していることを主張する。

5. まとめ

本論文では、「Vはしない」について、コーパス(BCCWJ, NDL)を用いてVの傾向性という観点から分析を行った。これにより明らかになったのは、次の3点である。

- A) 「Vはしない」に生起する動詞に無意志動詞がより多く接続するという明確な傾向があること
- B) 上記の傾向が「Vはしない」が「主観的否定」という構文としての意味機能に関連していること
- C) 「主観的否定」の意味内容のうち1つは、意志を表す用法であること

今後はこの結果を受けて、「Vはしない」が第三者の状況などを表す場合の主観性についても明らかにすることを目指す。「Vはしない」にも、「スラヘン」や「セン」のように3人称などを主語にし、状況を表す用法も存在する。例えば、(4)(d)「宝くじは当たりはしない」はその1例である。

- (4) (d) 「宝くじは当たりはしない。」
(31) 「こんな状態で、脱走などではしない。」

状況判断を表す場合は、意志文の制約も無くなるためポジティブな動詞も多く用いられる。「宝くじが当たる」「脱走ができる」は肯定的な事態であり、共に意志文ではない。状況判断における主観性をどのように定義するか検討する必要がある。
その詳細を、今後の課題としていきたい。

参考文献

- 尾上圭介 (1981) 「「は」の係助詞性と表現的機能」『国語と国文学』58-5
北崎 勇帆 (2021) 「中世・近世における従属節末の意志形式の生起」『日本語の研究』17-2
工藤真由美 (1992) 「宇和島方言の2つの否定形式」『国文学解釈と鑑賞』57-7
高恩赦 (2012) 「動詞の意志性」を問うー可能形式との関わりを中心にー『日本語文法』12-2
杉本和之 (1995) 「意志動詞と無意志動詞の研究ーその1」『愛媛大学教養部紀要』28-3
杉本和之 (1997) 「意志動詞と無意志動詞の研究：その2」『愛媛大学教養部紀要』29-2
丹羽一彌 (2002) 「否定形式ンとセンについて」『人文科学論集 文化コミュニケーション学科編』
36 信州大学人文学部
仁田義雄 (1988) 「意志動詞と無意志動詞」『言語』17-5
日本語教育学会 (2005) 『新版日本語教育事典』大修館書店
野田晴美 (1995) 「「～ハ～ナイ」「～シハシナイ」「～ノデハナイ」「～ワケデハナイ」ーハとナイを含む否定の形ー」『日本語類義表現の文法 (上)』くろしお出版
橋本修 (2000) 「「てしまう」と「ない」との共起について」『筑波日本語研究』5
早津恵美子 (2018) 「日本語の意志動詞・無意志動詞とその構文的な性質 (研究ノート)」『ユーラシア諸言語の多様性と動機-20号記念号-』ユーラシア言語研究コンソーシアム
宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究 (国立国語研究所報告 43) [主として「第1部 意味特徴の記述 6. 意図」 pp422-429]』秀英出版
山崎和夫 (1982) 「ないの作用域について」『言語』11-11